神戸薬科大学 薬用植物園 レター
< Medicinal Botanical Garden Letter >

2026. 11. 17 発行
（Vol. 67）

Vol. 67に寄せて

11月に入り、急に冷え込んできました。今の時期はキク科の花が多く見られ、下の「見頃を迎えるその他の植物」でも数多く紹介しています。今回はキク科のヨモギをテーマとして取り上げました。ヨモギは春の植物というイメージがあるかもしれませんが、開花は秋になります。ただ、他のキク科の花とは異なり、風媒花であるため昆虫を引き寄せる必要がなく、花は地味で目立たず、代わりに数多くの花を咲かせます。また、学内の特にベンゼン池の周辺では黄色の花をよく見かけますね。これはキク科のツワブキです。ツワブキの根茎は「橐吾：たくご」と呼ばれ、民間薬（健胃など）としての利用もある薬用植物です。



ベンゼン池周辺の
ツワブキ

11月に見頃を迎える植物：ヨモギ（キク科）

和名：ヨモギ
学名：*Artemisia princeps* Pampanini
薬用部：葉、枝先
生薬名：艾葉（ガイヨウ）
用途：止血、消炎、補血
栽培場所：１号園
開花時期：10-11月




若葉の頃


葉の裏側

ヨモギについて

本州から九州、小笠原諸島、朝鮮半島に分布し、山野や路傍で普通に見られる多年草である。草丈は60~120 cm、地下では根茎が伸び、地上では茎が叢生し分枝しながら繁茂する。葉は互生で、春には羽状で中～深裂し、キクの葉に似た若葉が茂る。葉の裏面には短毛が密生して白っぽく見えるが、これを集めたものがお灸のモグサになる。夏頃に茎を立ち上げ、成長すると1 mを越える。花期は秋で、分枝した茎頂に複総状花序をつけ、淡褐色で、長さ約3 mm、幅約1.5 mmの管状花のみからなる頭花を多数密生する。開花期の花序付近の葉は、楕円形や披針形をしており、春に見られた葉の形とは異なるが、同じ香りを持ち、裏側には同様に毛が密生している。


オオヨモギ

艾葉について

日本薬局方収載（第十七改正から）の生薬で、名医別録（神農本草経と同時代の本草書）には中品に収載されている。局方では、ヨモギのほかにオオヨモギ（*A. montana*）も基原植物として記載されている。5月ごろから夏までの葉を採取し、乾燥したものが生薬「艾葉」として用いられる。艾葉は、止血や補血、冷えからくる痛みの治療を目的に、一般用漢方処方の中では芎帰膠艾湯（きゅうききょうがいとう）に配合される。漢方以外では、古くから湯浴料として、冷え性、腰痛、湿疹に用いられるほか、薬酒や化粧品などにも配合される。また、若葉は餅と一緒に突き込んで草餅にするなど、食用としても広く利用されている。


艾葉

11月に見頃を迎えるその他の植物　<科名はAPG分類体系による>


シマカンギク（キク科）
生薬名：菊花（キクカ・キッカ）
薬用部：頭花
効能：解熱、抗炎症、目の充血


リュウノウギク（キク科）
生薬名：竜脳菊（リュウノウギク）
薬用部：地上部
用途：浴湯剤（冷え、神経痛など）


イソギク（キク科）
海岸の崖や斜面などに生える。花は黄色の管状花のみからなり、葉は肉厚で白くフチどりされている。


ハマギク（キク科）
海岸の崖などに生え、下部は低木状である。葉は肉質で茎頂に多く生え、マーガレットに似た花をつける。


サフラン（アヤメ科）
生薬名：サフラン
薬用部：柱頭
効能：通経、鎮静、催眠など


チャノキ（ツバキ科）
生薬名：茶葉（チャヨウ）
薬用部：葉
効能：疲労回復、利尿


リンドウ（リンドウ科）
生薬名：竜胆（リュウタン）
薬用部：根、根茎
効能：苦味健胃・消炎

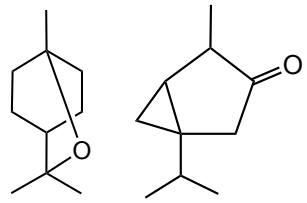

ラッキョウ（ヒガンバナ科）
生薬名：薤白（ガイハク）
薬用部：鱗茎
効能：健胃、鎮痛など

ステップアップ講座（艾葉の成分と活性、植物園のヨモギ属植物）

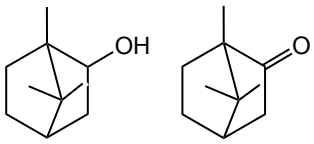
艾葉の成分と活性

艾葉は精油を含み特異なにおいのある生薬で、精油成分としては、モノテルペンに分類される1,8-シネオール、ツヨン、ボルネオール、カンファーなどが報告されている。また、セスキテルペンに分類されるヨモギン、フラボノイドに分類されるユーパチリン、クマリンに分類されるスコポレチン、ウンベリフェロンなどが含まれている。スコポレチンとウンベリフェロンは、局方の確認試験（TLC）において標準となる成分である。ヨモギ属植物のエキスや含有成分については多くの薬理試験が行われている。艾葉の熱水エキスには、マウスの腹腔内投与で止血作用がみられ、この作用は加熱処理によって増強することがわかっている。また、精油成分は抗菌作用をもつほか、IL-6などの炎症関連物質の産生を抑制し、ユーパチリンには抗炎症作用、ヨモギンにはNO産生阻害作用が報告されている。

<精油：モノテルペン>

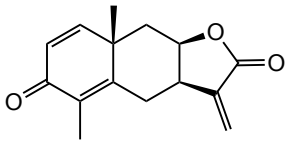


1,8-シネオール　ツヨン



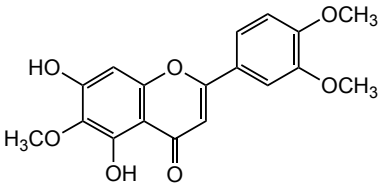
ボルネオール　カンファー

<セスキテルペン>



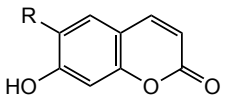
ヨモギン

<フラボノイド>



ユーパチリン

<クマリン>



R＝OCH_3：スコポレチン
R＝H：ウンベリフェロン

艾葉配合の漢方処方：芎帰膠艾湯

漢方では、艾葉は気血を調え、寒湿を除き、体を温め、止血する薬能を持つとされる。芎帰膠艾湯は、補血剤である四物湯に甘草、艾葉、阿膠（ロバの皮や骨などから作られた膠（にかわ）でゼラチンが主成分である）を加味した処方である。阿膠は艾葉とともに止血の要薬で、本処方は、血を補い、巡らし、温めて止血する効能を持つ。比較的体力の低下した人の月経痛や下腹部の冷え、腹痛の緩和、出血性疾患の治療などに用いられる。

植物園のヨモギ属（*Artemisia*属）植物

植物園で栽培しているヨモギ属植物のカワラヨモギとミブヨモギを紹介する。



カワラヨモギ

カワラヨモギ（*A. capillaris*）は、日本では本州以南で見られ、河原や海岸の砂地に生育する多年草である。草丈は30~100 cm、茎の下部はやや木質で直立し、よく分枝する。葉は2回羽状で全裂し、糸状である。花期は秋で、茎頂に大型の円錐花序をつけ、緑黄色で、長さ・幅ともに1.5~2 mmの頭花を多数密生する。頭花は、生薬（茵蔯蒿：インチンコウ）として用いられ、古くから黄疸を治す薬能があるとされる。一般用漢方では、消炎、利胆（胆汁の分泌や排泄を促進する作用）、利水作用を目的に、茵蔯五苓散、茵蔯蒿湯など４処方に配合される。



ミブヨモギ

ミブヨモギ（*A. maritima*）は、ヨーロッパ南部、中央アジア原産で、各地で薬用として栽培される多年草である。草丈は約100 cm、茎はよく分枝し、全体に白綿毛があり、白っぽく見える。葉は2回羽状で深裂し、線形である。花期は秋で、茎の上部に総状花序をつけ、卵形の小さな頭花をつける。ミブヨモギの花蕾を含む全草には、回虫駆除作用をもつサントニンが含まれている。昭和初期には、多くの国民が回虫に悩まされていたが、日本新薬（株）が本植物の種子を手に入れ栽培し、植物からサントニンを取り出すことに成功したおかげで、多くの人が回虫を駆除し健康を取り戻すことができたとのことだ。この植物は、日本新薬の所在地である京都の壬生（みぶ）で栽培されたことから、ミブヨモギと名付けられた。

MEMO：モグサ（艾）の原料

ヨモギやオオヨモギなどの葉の裏側にある毛を集め精製したものが、お灸に用いられるモグサである。葉を乾燥させた後、石臼で挽きながら、ふるいを用いて毛だけを集めるという作業を繰り返して作られる。モグサは、精製度の違いによって燃焼温度や燃焼時間などに違いが出てくるので、目的によって選ぶと良いそうだ。



MEMO：名前の由来

和名のヨモギは、葉から作られるモグサがよく燃えるから「善燃草：よくもえぐさ」、四方八方に地下茎を伸ばし繁茂する様子から「四方草：よもぎさ」、食用などとしてよく揉んで使ったことから「揉み草：もみぐさ」に由来するなど、いくつかの説がある。

ヨモギからマラリア治療薬の発見

ヨモギ属植物の中にクソニンジン（*A. annua*）という植物があります。少しかわいそうな名前ですが、全草に独特なにおいがあり、ニンジンの葉に似ていることから名付けられたそうです。日本では、帰化植物として普通に見られる植物です。この植物は中国では、黄花蒿（オウカコウ）あるいは青蒿（セイコウ）と呼ばれ、主に解熱の目的で全草が用いられています。

普通に見られる植物ですが、この植物について詳しい研究がなされた結果、抗マラリア活性を持つ化合物アルテミシニン（セスキテルペン化合物）が発見されました。この化合物やその誘導体には、キニーネに抵抗性を示すマラリアにも有効性が認められ、この発見により多くのマラリア患者の命が救われました。研究者は中国の屠 呦呦博士で、この功績により、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞しました。



編集後記

G棟から植物園までの坂道に、キク科のサンシチソウが咲いています。オレンジ色の管状花のみからなる花で、長い雌しべの柱頭が２つに分かれているのが目立ちます。お世辞にも良いとは言えない独特なにおいがありますが、見た目はかなり可愛いです。ウコギ科の生薬サンシチニンジン（三七人参）と名前が似ていますが、基原植物ではないので、ご注意ください。

神戸薬科大学　薬用植物園
園長 土反伸和（医薬細胞生物学研究室 教授）
西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博
E-mail：nisiyama@kobepharma-u.ac.jp
総合教育研究センター支援部門　竹仲由希子

